2章 さいわいの今・昔

社会人になって幸区に引っ越してきた
幸区民1年ちょっとの【みゆきさん】は
せっかく住み始めたまちのことを
もっといっぱい知りたいと思い
幸区の歴史について詳しい
【さいわい先生】のもとにやってきました

第2章では　この2人の話を聞きながら
幸区域の時代ごとのエピソードを追体験し
現代に至るまでの幸区域の軌跡を
一緒に楽しく学んでいきましょう！

コラム1

幸区を知ろう！（幸区の基本情報）

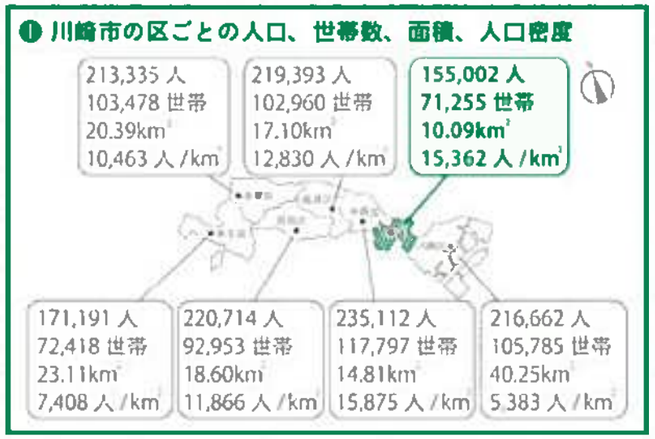
1972年4月1日に、川崎市が政令指定都市となり、川崎・幸・中原・高津・多摩の5区が設けられ、1982年7月1日に、宮前区が高津区から、麻生区が多摩区から分区され、現在と同じ7つの区ができました。

幸区は、川崎市南東部に位置し、川崎区・中原区・神奈川県横浜市・東京都大田区と接しています。区ごとの人口などの比較や、区が誕生してから40年間の変化など、幸区の基本情報をのぞいてみましょう！

1 川崎市の7区の比較

幸区の人口は、2012年1月1日現在で、155,002人、世帯数は71,255世帯であり、どちらも川崎市の7区の中で、最も少ない数字です。面積は10.09km²と、7区の中で最も小さいのですが、人口密度（1km²あたりの面積）は15,362人／km²と川崎市で2番目に高い区であり、居住する人の密度が高いことを示しています。

❶ 川崎市の区ごとの人口、世帯数、面積、人口密度

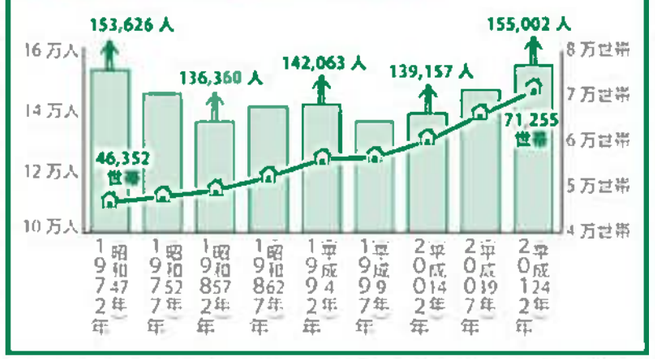


2012年1月1日現在

2 幸区の40年間の変化

40年前には工場が多く、そこで働く人々をはじめとして、人口も153,626人と高い数字でした。その後、工場の移転・廃止を一つの理由として人口は減少していきました。しかし、工場跡地などに大型マンションなどが建設され、1998年8月の135,363人を最小として、それ以降は増え続けており、2012年現在は155,002人となっています。

❷ 幸区誕生から5年毎の人口と世帯数



1972年～2007年は10月1日現在、2012年は1月1日現在

3 幸区の3つの地区

幸区は大きく分けて3つの地区に分かれており、それぞれのまちで雰囲気が違っていたり、特色があったりします。そんなことを思いながら3つの地区を歩いてみると、新たな気づきがあるかもしれません。

御幸地区　区役所、文化センター、スポーツセンターなど公共施設が集まっています。

南河原地区　川崎駅西口に接しており、交通や買い物などの利便性が高いです。

日吉地区　夢見ヶ崎動物公園周辺をはじめとして歴史的な話がたくさんあります。

❸ 幸区の3つの地区と町名

①、②の世帯数と人口は、国勢調査を基数とし、以後の住民基本台帳及び外国人登録の増減を加減して推算したものです。

加瀬山から始まった

小倉陸橋から見た加瀬山（平成初期）
【提供】さいわい歴史の会

幸区民の憩いの場である加瀬山は、古代の幸区域の人々にとってもかけがえのない存在でした。ここではこの加瀬山にスポットライトを当ててみます。

縄文時代前期頃（約6,500～5,500年前）
幸区域は加瀬山周辺のみが陸地になっていた。

古墳時代頃（約1,700～1,400年前）

幸区域と海岸線の変遷
川崎市市民ミュージアム編『川崎の考古』（昭和63年）を原図に改変

【南加瀬貝塚】

今日は幸区の歴史を教えてもらいたくて来ました。よろしくお願いします！

はい、よろしくお願いします。では現在分かっている一番古い歴史から話す事にしましょう。みゆきさんは貝塚を知っていますか？

昔の人たちがゴミ捨て場として使っていた場所で、徐々に貝殻が堆積していって層になった、ということを歴史の授業で習いました。

実際には土器や石器、人間や動物の骨なども一緒に出土しています。貝塚は幸区の中でも発見されていて、それが加瀬山のあたりにあったのですよ。加瀬山は知っていますよね？

はい。「夢見ヶ崎動物公園」がある山ですよね。何度か行ったことがありますよ！貝塚はいつごろ発見されたんですか？

明治27（1894）年には、その存在が知られていたようですよ。「東京人類学雑誌」という冊子の中では「橘樹郡日吉村字南加瀬」にあったことが紹介されています。明治37（1904）年4月24日には発掘調査が行われて、いくらか土器片が見つかりました。また、このような発掘調査が行われていく中で、当時としては画期的な発見もあったそうなんです。

へぇ！画期的な発見って、どんなものだったんですか？

貝塚の縄文時代の層と、古墳時代の層から土器が出土していたのですが、2つの地層に挟まれた地層からも土器が見つかったのです。いわゆる弥生土器です。それまでどちらが先か明確でなかった縄文時代と弥生時代ですが、この発見がその時期を特定する、1つの大きな証拠になりました。また、加瀬山の上からは、貝塚を使っていた人たちが住んでいたと思われる、弥生時代の住居跡も発掘されています。

幸区にそんな場所があったなんて驚きです！ぜひ見に行ってみたいな！

残念ながら今はもうありません。その後、大規模な調査が行われないうちに、貝塚にある貝殻が畑の肥料として有効なことから大量に持ち去られたり、川崎駅西口一帯の開発を行う際、土地をかさ上げするために、山の東南部が崩されるなどしたためです。日本の考古学の発展史上、大変貴重な遺跡が、残念ながら姿を消してしまったのです。

今の幸区をつくるために行われたことだったとはいえ、確かに残念なことですね。

でも実は、今でも地表面をよく見ると、貝の欠片を発見することはできますよ。幸区役所日吉合同庁舎前を通っている、加瀬山への上り坂の右手に南加瀬貝塚の案内板が立てられています。

それは面白そう！今度見に行ってみたいと思います！

【白山古墳】

縄文時代や弥生時代から幸区域に人が住んでいたのなら、それ以降も加瀬山や周辺で人の生活はあったのでしょうか？

加瀬山では「白山古墳」という4世紀末ころのものといわれる前方後円墳が見つかっていますよ。古墳はその土地の首長などを埋葬するための施設なので、当時の加瀬山周辺にも、それなりの規模の村などがあったと考えられます。日本では弥生時代から稲作耕作が始まっているので、農耕をする人も多く住んでいたのではないでしょうか。

加瀬山には古墳もあったんですね！前方後円墳ってとても大きな印象がありますが、白山古墳の場合はどの程度の大きさなんですか？

白山古墳は全長87m、高さ10mもあったそうです。これは南関東で最大級の規模と言われています。白山古墳に埋葬された人物がこの地の首長だったなら、小国家級の首長だったのだろうと思えるほどの大きさなのですよ。

白山古墳では、出土品も見つかっているんですか？

古墳からは、三角縁神獣鏡・斧・ヤリガンナ・ノミなどが出土しています。その中でも特に三角縁神獣鏡が見つかったことには重要な意味がありました。

へぇ、重要な意味って何ですか？知りたいです！

三角縁神獣鏡というのは、西暦239年頃、現在の中国から大和朝廷に送られたものか、もしくはそれを日本で複製したものらしいのですが、白山古墳で見つかった鏡は、山城国（現在の京都府）で見つかったものと同じ鋳型で造られたものでした。つまり、この地の豪族が、大和朝廷と強いつながりを持っていたということを示しているのです。

大昔から遠く離れた地域とつながっていたんですね。ところで白山古墳は今もあるんですか？

昭和初期、新鶴見操車場や、新工場用地の造成のために、加瀬山と同様に白山古墳も切り崩されてしまったのです。現在は白山幼稚園の西側の住宅街などが、その跡にあたります。

【加瀬の豪族】

加瀬山や南加瀬貝塚など、「加瀬」という地名が多く出てきますよね。加瀬は昔から使われていた言葉なんですか？

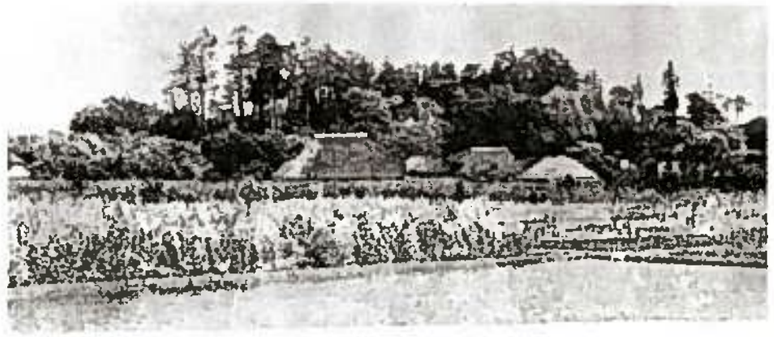
鎌倉時代に山城国からやってきた豪族の名前が定着したようです。「新編武蔵風土記稿」の「南加瀬村」のくだりには、「鎌倉時代の初め、加瀬左近将監資親という人が、武蔵守になった北条時房（北条時政の子、北条政子の弟）に従って関東にやってきて、三代にわたりこのあたりに住んでいたので、この一帯は「加瀬」と呼ばれるように

加瀬山と白山古墳の位置関係。
川崎市市民ミュージアム編『加瀬白古墳群の研究』を原図に改変

白山古墳から出土した「三角縁神獣鏡」
【提供】慶應義塾大学民族学考古学研究室

「南加瀬貝塚」についての案内板
脇にある庚申塚が目印

国宝「秋草文壺」
【所蔵】慶応義塾



白山古墳全景（昭和12年頃）
【提供】慶應義塾大学民族学考古学研究室

なった。また、「加瀬」は資親らが山城国相楽郡賀勢郷から出てきたのでそのように称した。」ということが書かれています。

その加瀬さんは、具体的に何をするためにこの地にやってきたんですか？

後鳥羽上皇が所有していた土地の一部を、娘である皇女、宜陽門院勲子内親王に与えた際の文書の中に、「武蔵国賀勢庄」の庄名が書かれていました。庄は荘園のことです。賀勢庄は皇族の所領地で、特に目立った武士がいない中で、北条時房に従ってきた加瀬氏が、その管理者になったと考えられているんですよ。

加瀬さんが幸区のあたりを管理していたんですね。

そうですね。おそらく加瀬山のどこかに城（館）を構えていたのではないかといわれています。近くに菩提寺を開き、武者としての馬場を設け、井戸や用水を掘り、加瀬山のふもとには農民の家々があったのではないかと考えられています。

加瀬山の上にお城、山の下には田園風景が広がっていた、その当時の風景を見てみたかったな。

【秋草文壺】

みゆきさんは、「秋草文壺」を知っていますか？

う～ん、すみません、知りません。壺ですか？

昭和17（1942）年に白山古墳の後円部の裾から、土取工事の際に偶然出てきた壺のことです。高さ40・6cm、口径16cm、胴径29cmの陶器の壺で、中に火葬された骨片が詰まった状態で見つかったそうです。外面にススキ・ウリなどの秋草やトンボなどの文様が、へら描きによって軽快に表現されています。

精巧な大きい壺なんですね。火葬された骨片が詰まっていたということは、骨壺なんですか？

そう、おそらく骨壺として使われていたのだろうと言われています。それもあるからでしょうか、引き取り手が出ない中、白山古墳の発掘から関わりをもっていた慶應義塾大学で保管されることになりました。現在は慶應義塾大学から東京国立博物館に寄託され、大切に保管されています。

え？立派なものとはいえ、骨壺なんですよね？なんで東京国立博物館のような大きな博物館に所蔵される事になったんですか？

実は慶應義塾大学に渡った後の研究で、この壺が平安末期に焼かれた渥美焼の逸品であることが分かりました。さらにその後、陶器国宝の第一号に指定されもしたのです。このように大切なものですから、東京国立博物館で保存することにしたそうですよ。

偶然見つけた人は、そんな立派なものだとは思わなかったのかもしれませんね。でも、ちゃんとしたところに保管されているなら安心ですね！それにしても、壺に納められた骨は一体誰のものだったんでしょうか？

それについては今も謎を残している部分なのですが、このような立派なものに納められていたのですから、それなりの身分の人だったのでしょうね。

【寿源寺】

加瀬山に関連した歴史をここまで話してきましたが、最後にもう一つ、「寿源寺」についても触れておきたいと思います。正式には「浄土宗唯称名院」と号していた、建武元（1334）年に創建されたといわれているお寺です。江戸時代の代表的な地誌旅行ガイドブックである「江戸名所図会」には、川崎大師などとともに、川崎の名所として紹介されています。

加瀬山には本当に色々な歴史が詰まっているんですね。やっぱりこのお寺も加瀬氏と関わりがあるんですか？

実はそのような意見もあります。先に出てきた「吾妻鏡」では、「承久3（1221）年に宇治橋合戦で加瀬左近将監、同弥次郎死す」と書かれているます。このことから寿源寺は、加瀬氏らを弔うために建てられた菩提寺ではないかとの説があります。

寿源寺については現存しておらず、墓標群だけが夢見ヶ崎動物公園の西側斜面下に今も残っています。

かつて寿源寺があった地点
（ひがし前バス停付近）

絵・右下：寿源寺　絵・階段上：天照皇大神
【出典】『新訂 江戸名所図会 3』

南加瀬貝塚が示す通り、幸区域での人々の営みは加瀬山から始まりました。新鶴見操車場や近年の再開発で地盤を固めるため、山の一部が削り取られたこともありましたが、今なお多くの幸区民が訪れるこの加瀬山は、まさに幸区の「父なる山」であり、これからも幸区を見守ってくれるでしょう。

加瀬山を削りトロッコで土を運ぶ
（明治末期）【出典】日吉小学校記念誌

太田道灌の夢見

太田道灌の肖像画
【出典】『関東武士研究叢書 第3巻 太田氏の研究』

江戸時代の中ごろに編集された、「新編武蔵風土記稿」の「南加瀬」の条に、「東方の山はづれを夢見ヶ崎と云、其ゆゑんを尋るに昔太田道灌この地へ城を築んと思ひしに、或夜道灌己がかぶとを鷲の来て掴み郡内駒岡村と云所へ飛去りしと夢見しかば、此事不吉なりとて其企やめけりと、其跡を夢見ヶ崎とは唱るよし土人は伝ふれども、外により所なし」とあります。昔、太田道灌が加瀬山に城を築こうとしたが、夢の中で鷲に兜を取られたことを不吉に思い、その考えを思いとどまったという話ですが、地域の伝承以外にその話は聞かれないと、200年前にすでに根拠のない話とされていたようです。太田道灌は25歳で江戸の江戸氏を追い出し、長禄元（1457）年に江戸城を築いています。加瀬山に城を築いたのなら、それよりも以前のはずなのですが、そんなに若くして城を築いたというのは、あまり現実的ではありません。

なお、加瀬山南麓にあった寿源寺が寛正元（1460）年に「兵火に罹った」とあり、もしかすると太田道灌が小机城を攻めた際の話が、形を変えて出てきたのではないかと考えることもできます。

寺社にまつわる物語

私たちの暮らしのそばで、静かに佇むお寺や神社。ここでは、みなさんの興味を引くような、いくつかのお寺や神社にゆかりのある話を紹介します。

幸町にある円真寺

円真寺の境内にある蒲田家墓地内の宝篋印塔

【円真寺宝篋印塔と江戸氏】

突然ですが、南河原にある円真寺は知っていますか？

円真寺ですか。残念ながら知りません。

南河原村の草創期から、延命寺とともにこの地にあるお寺です。安房国（現在の千葉県館山市・南房総市・鴨川市・鋸南町）にある小湊誕生寺の末寺で、慶長9（1604）年に建立された日蓮宗のお寺ですよ。境内には寛永17（1640）年の銘がある高さ3m近い宝篋印塔があります。

ホウキョウイントウですか。どのようなものなんですか？

宝篋印塔は現在・過去・未来の幸福を願った仏典（宝篋印陀羅尼）を書いて納めた塔のことですが、いつからか供養塔・墓碑塔として建てられるようになりました。円真寺の宝篋印塔は、この寺を開いた蒲田所左衛門の供養塔です。この宝篋印塔の周りには蒲田姓の墓碑が数基あり、中世以来この近辺の名族であったことがうかがわれます。

加瀬氏以外の一族の活躍がここにきて出てくるわけですね！蒲田所左衛門という人はどのような人だったのですか？

蒲田所左衛門は、小田原北条氏の御家門方で、室町期に関東の名族と呼ばれた江戸氏の一族です。蒲田・六郷に居住した一族が、その地名を姓として名乗ったもののようです。

幸区域は川を挟んだ対岸の蒲田や六郷とも、その当時から関係があったわけですね。ちなみに「蒲田」という地名はそのころから使われていたんですか。

すでに平安時代には存在していた記録があります。

相当古くからある地名なのですね。江戸氏の「江戸」は、東京の江戸ですか？

ええそうです。12世紀の半ばごろに秩父から江戸に移り、江戸氏を称したことから始まっています。12世紀から14世紀にかけて現在の東京都大田区近辺で力をつけ、「江戸氏十八支流」といわれる大族を従え関東の有力豪族として栄えました。蒲田氏もその中の一族です。

それだけ大きな存在感があったのなら、もしかして江戸城を作ったのも江戸氏なのですか？

現在の江戸城本丸の位置に居館を構えたのは確かに江戸氏です。しかしその後、力を失った江戸氏を太田道灌が追い出し、その居館跡に江戸城を築きました。

そうか、太田道灌が江戸城を築城したという話は聞いたことがあります。でも、江戸氏はなぜ力を失ってしまったのですか？

戦国期、江戸氏は豊臣秀吉の小田原征伐に対抗した、後北条氏に加ったのですが、その戦に敗れてしまったのです。その結果、東京の喜多見に逃れ、姓を喜多見氏と変えました。喜多見氏はその後徳川氏の旗本となり、徳川5代将軍綱吉の側用人となりましたが、身内の不祥事によりその末裔は力を失いました。

下平間の称名寺。毎年12月14日、吉良邸討ち入りの日に合わせ、赤穂浪士所縁の品々を一般公開している。【提供】称名寺

「誠忠義士肖像 富之森祐右エ門正国」
【所蔵】国立歴史民俗博物館

【幸区と赤穂浪士】

元禄15（1702）年12月、主君浅野内匠頭長矩の仇である、吉良上野介義央を討った元赤穂浪士47人のことについて、ここでは話したいと思います。

忠臣蔵のお話ですね。テレビドラマや映画で何度か見たことがあります。でも、どうしてその話をここでするのですか？

もちろん幸区にも関連したエピソードがあるからです。赤穂浪士の1人、富森助右衛門が下平間村に隠れ住んで、地域の子どもたちに読み書きを教えながら、仇討ちの機会を狙っていたのです。

赤穂浪士は皆、機会がくるまで各地に潜んでいたことは知っていたけど、そのうちの一つが下平間だったんですね！

そうですね。いよいよ仇討ちという時、大石内蔵助ら首謀者もここに集結したそうですよ。このことは下平間の法安寺境内に残る、赤穂浪士顕彰碑の裏面に記載されています。この碑は大正13（1924）年に、下平間の有志ら40名余りが建立したものです。

大石内蔵助も下平間に来たことがあるなんて、すごいなと思います。でもなんで富森助右衛門は、下平間村を隠れ家に選んだのでしょうか？

下平間村の年寄役を務めていた軽部五兵衛が、江戸の築地にあった浅野内匠頭の屋敷に、以前から下肥をもらうために出入りしていました。その関係で、浅野内匠頭が御家断絶された際に、屋敷引き払い

「紙本着色四十七士像」
【所蔵】称名寺

塚越の塚

昭和中期頃の塚越の塚
【出典】『川崎史話　上巻』

「新編武蔵風土記稿」の「塚越村」の条に記された説によると、幸区内にある「塚越」という地名は、南武線鹿島田駅と矢向駅の中間、東明寺や御嶽神社の西方にあたる、塚越から下平間へ通じる道路際にある塚（古墳）が由来であるとされています。ここにある古墳は、高さが3.2m、直径が17mほどの円墳であると云われています。

近くにある御嶽神社で土盛りを行った際、この塚の土が取り崩され使用されたそうですが、その際には刀剣などが出土したと伝えられています。

また、南北朝時代に新田義興が矢口の渡しで戦った際、放たれた矢がこの塚を越えて飛んでいったことから、この地が「塚越」と呼ばれるようになったとも伝えられています。

二ヶ領絵図（明治時代初期）
【所蔵】川崎市市民ミュージアム

二ヶ領用水の誕生

二ヶ領用水は、幸区域はもとより、多くの地域に潤いと安らぎを与えてきた用水路です。その開墾や完成などにまつわるエピソードを紹介します。

鹿島田堰の取水口開閉装置（現存せず）。右手の鳥居の位置で町田堀（右）と大師堀（左）へ分岐する。【提供】さいわい歴史の会（平成17年撮影）

【二ヶ領用水】

以前、散歩をしているときに、「二ヶ領用水」という用水路を見つけました。あの用水路はいつごろからあるんですか？

実はニヶ領用水の話をするには江戸時代以前までさかのぼる必要があります。徳川家康が天正18（1590）年に、駿府から江戸に移転しましたが、江戸で農業生産力を高める必要性が生じたために、治水灌漑事業を推進し、農耕地を拡大していくことになりました。

そんな以前の話が出てくるとは思いませんでした！

灌漑事業の指揮監督をしたのは、自らその必要性を進言した小泉次大夫です。次大夫は慶長4（1599）年、稲毛領・川崎領にニヶ領用水を開削し、慶長16（1611）年に完成させました。それと共に、稲毛領37ヶ村、川崎領23ヶ村で合わせて1876町歩＝約1860haもの耕地が開かれました。

平成23（2011）年で、二ヶ領用水は完成から400年も経ったんですね！

そうなんです。ただ、その400年の間、何度も造成や改修が行われました。例えば耕地の拡大が続き、灌漑用水が足りなくなったため、寛永6（1629）年に中野島取入口と下流の宿河原取入口が造成されました。

中野島と宿河原はどちらも多摩区ですよね。その当時にそれだけ長い用水路を整備しただなんて、気の遠くなるような話ですね。

本当に大変なことだったのだと思います。幸区域のニヶ領用水は、古川村、大師河原村へと流れる「大師堀」と、矢向村、小田村にいく「町田堀」がありました。鹿島田駅から古市場の方向に少し歩いた所に、二つの堀の分岐点である鹿島田堰の名残りがありますよ。

【田中休愚】

二ヶ領用水の造成や改修は、いつごろ行われたんですか？

ニヶ領用水の完成から100年ほど経った後に大改修が行われました。この工事を手がけたのは田中休愚という人ですが、とても特徴ある人生を送った人物ですよ。

へえ！田中休愚ってどんな人だったんですか？

休愚は寛文2（1662）年、武州多摩郡平沢村（現在の東京都あきる野市）に窪島八郎左衛門の二男として生まれました。農業の傍ら絹織物の行商に関わり、武州橘樹郡小向村の田中源左衛門宅に出入りし、その縁もあって川崎宿下本陣の田中兵庫家の養子となりました。

本陣って当時の偉い方々が使用した宿舎のことですよね？農家出身の人がその養子に迎えられたってことは、相当能力のある人の作業の手伝いに駆けつけていたようです。赤穂浪士と下平間との関係はこのあたりにあるのではないかと考えられます。なお、軽部五兵衛の墓は、戦後加瀬山の丁源寺の墓地に移されて、現存しています。

菩提寺からの関係づくりが、信頼へとつながっていたんですね。

そのようですね。なお、法安寺の顕彰碑に刻まれた浪士の氏名や書蹟は、現在近くの称名寺に所蔵されている「紙本着色四十七士像」や「大石良雄の書」というものと一致しています。これら赤穂浪士所縁の遺品類は、吉良邸への討ち入りの日である毎年12月14日に、称名寺で一般に公開されているので、ぜひ見に行ってみるとよいですよ。

十一段目（終段）　義士討ち入りの場

大序（初段）　鶴ヶ丘社前の場

『仮名手本忠臣蔵屏風絵』
【所蔵】東小倉・成川前氏

幸区内にあるお寺や神社は、それぞれが長い歴史を歩んできており、それに応じた数々のエピソードがあります。ここで紹介した例に限らず、幸区内のお寺や神社を散策しながら、まだ知らぬ幸区の歴史を見つけてみてはいかがでしょうか。

女躰神社

女躰神社

幸町の女躰神社は、南河原地域の鎮守です。このあたりはずいぶん昔から、地域の北をようようと流れる多摩川の洪水に見舞われてきました。堤防を築いてもすぐ水に流されました。これを見かねた村の女性が、自ら多摩川の水の神に身を捧げました。その後は堤防が壊されなくなったといいます。その女性の霊魂を祀ったのがこの女躰神社だといわれています。

そのことを川崎の生んだ詩人佐藤惣之助が、その作品「市井鬼」という随想集の中の「女體神社」という小文に書いています。また、本殿の右手の碑石の裏面には、かつてこの地に住んだ歌手の渡辺はま子が「神田」を寄進した1人であることが刻まれています。

杉山神社

杉山神社

「小倉」という名は、奈良・平安の昔、朝廷の荘園において貢納物を収納する「大倉」に対する語であると考えられますが、杉山神社はこのころから、この地に鎮座していたのではなかろうかと云われています。この「杉山神社」は、鶴見川流域に70社あまりが散在して祀られていたと伝えています。そのうちの1社が平安初期に編集された「延喜式」に、「式内社」として記載されていますが、現存するどの杉山神社のことであるか、定かではありません。それほど古い神社で、祭神もまた倭猛命や五十猛命と諸説あり、一定していません。

なお小倉にある杉山神社は、江戸時代以前に橘樹郡小机郷（現在の横浜市港北区小机町）にあった小机城の笠原氏が参拝したと伝えています。

小向・妙光寺境内にある田中休愚の墓

田中休愚の肖像画
【出典】『川崎市史 通史編2』

佐藤惣之助の肖像のレリーフ
（川崎駅東口の川崎信用金庫本店前）

だったってことですか？

まさにその通りです。宝永元（1704）年には家督を継いで本陣の当主となり、やがて名主（村の代表）・問屋を兼務し、当時疲弊していた川崎宿を立て直しました。

どんどん話の規模が大きくなっていきますね！

彼はその後、それまでの経験を活かし、民政上の意見書である「民間省要」を完成させました。そしてこの意見書がきっかけで江戸幕府の請方役人に登用され、荒川や多摩川、酒匂川の治水工事に活躍しました。さらには六郷・二ヶ領用水の大改修をも手がけたのです。

どれも大きな川ですね。そこで培った技術をニヶ領用水の改修にも役立てたんですね。

享保14（1729）年にはその実績を買われ、大岡越前守配下の支配勘定格に抜擢されて、3万石を管轄するまでになりました。

スゴイ！農家の生まれから、そこまで出世するなんて。

そうですね。ですが、残念なことに数ヶ月後に江戸浜町の役宅で没しました。休愚の墓は小向の妙光寺境内にあります。墓石の左手前には息子喜乗が建てた当時の儒学者成島道筑選文による碑があり、それまでの業績が刻まれています。

【佐藤惣之助】

田中休愚に関連して、川崎が生んだ詩人である佐藤惣之助を紹介します。代々、川崎宿上本陣を務めた家の二男として、明治23（1890）年に生まれました。

休愚が亡くなってから100年以上あとに生まれた人ですね。どのような関係なんですか？

昭和5（1930）年刊行の随筆集「青神」に、「水の聖」「丘隅右衛門」の小文を発表しています。その中で同じ川崎宿の本陣を務めた休愚の偉大な業績に、敬愛の念をこめて一文をつづっています。

休愚の偉大さは後世にしっかり伝わったのですね。佐藤惣之助は、川崎の生んだ詩人というくらいですし、他にも川崎に関連した作品を発表しているんですか？

例えば、南河原の女躰神社について随想集「市井鬼」に「女體神社」の一文を載せ、大正時代の、南河原の様子を書いています。

ああ、ラゾーナ川崎プラザの北側にある神社ですね。あの辺りは昔どんな姿だったのだろう？まあそれはそれとして、何か知っている作品もあるのかな？

惣之助は、大正から昭和の初期に活躍し、作詞家としての顔も持っていました。歌謡曲の作詞としては「青い背広で」「赤城の子守唄」などの他、阪神タイガースの応援歌「六甲颪」も惣之助の作品です。

六甲颪はもちろん知っていますよ！そんな昔からある曲だとは知らなかったな。

急に親近感が湧いてきましたか？なお彼の墓地は、幸区神明町にある正教寺の本陣佐藤家の墓域に建てられています。

平成23（2011）年に竣工400年を迎え、今なお愛され続けているニヶ領用水。どのような苦労をもって造成されていったのか少しでも感じてもらえれば、今はその用途を変え、親しみやすい水空間となったこの用水も、いつもと違った表情を表すかもしれませんね。

御幸小学校の前身である玉光舎が置かれていた妙光寺

寺子屋が置かれていた無量院

常教学校が置かれていた浄運寺
常教さんという愛称でも親しまれます

【教育の歴史】

宝永年間から明治始めにかけて、幸区域には31もの寺子屋がありました。

寺子屋は学び舎のようなものですよね。いっぱいあったんだ！

ええ。一例として、北加瀬の了源寺や寿福寺、鹿島田の浄運寺、小倉の無量院、塚越の東明寺、小向の妙光寺、神明町の静新寺、南河原の延命寺や円真寺が挙げられます。

寺子屋というなら、お寺のお坊さんが教えていたんですか？

やはりそれぞれの地域のお寺の住職が圧倒的に多かったのですが、中には農民や平民の身分の「先生」もいたようです。

教育に通じた人がいたんだ。例えばどのような人ですか？

農民の身分で、小向の野崎伝三郎や古川の石井新八郎、戸手の服部某や狩野益雄、南河原の伊藤三右衛門と伊藤重左衛門、養父内勇など、各地にいたそうですよ。

幸区域全体に学びの場と機会があったんですね。

江戸期における幸区域の教育水準は高かったようです。そうそう、数ヶ月ほどですが、下平間の法安寺で、赤穂浪士の富森助右衛門も寺子屋を開いていたそうです。

そうなんですか！その後教育はどのように変わったんですか？

明治5（1872）年に、明治新政府が「学制」をつくり、「学事奨励に関する被仰出書」という教育政策を公布しました。

オオセイダサレショ、ってどんなものですか。

簡単に言うと学ぶ場としての学校が必要だ、ということを国の規模で宣言したものです。そしてこれを受けて、寺子屋を土台として、明治6（1873）年に小学校が起こされました。

幸区域でも、この時に小学校が置かれたんですね。

小向村の妙光寺に玉光舎（→御幸・小向・古川・下平間・南河原小学校）、中丸子村に量教学校（→古市場小学校）、鹿島田村に常教学校（→鹿島田・小倉・南加瀬・日吉小学校）がそれぞれ誕生しました。

※（　）内は後に分校した小学校名に通じます（幸区内の小学校のみ記載）。

どの学校もいろんな経緯をたどって、今日に至ったんですね。

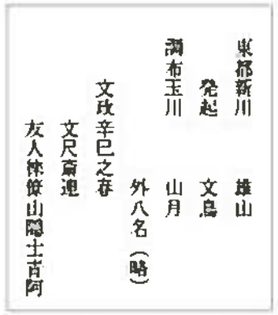
ほんたばあさん

紺屋町にある本田地蔵尊

紺屋町の正教寺近くに「ほんたばあさん」と呼ばれる地蔵尊の祠があります。戦後しばらく後まで、祠の格子に麻がたくさん結び付けられ、堂前には線香の煙りが絶えませんでした。ほんたばあさんにお願いすることで、子どもの風邪を治してくれるということで、近所の人はもちろん、南河原の方からも風邪を引いた子どもを連れた人々が、ほんたばあさんに祈願しに来ていました。祈願すると同時に格子の麻をいただいて、子どもの首に巻いて家に帰る風習もあり、子どもの風邪が治ると新しい麻を格子に結び、お茶を半紙に少量包んでお礼をしたそうです。これは、この辺りから東京一円に行われていた「咳のばあさま」と呼ばれる民間信仰です。江戸時代からつい最近まであり、日本民俗学を拓いた柳田国男の「日本の伝説」でも述べられています。

加瀬山にある了源寺

了源寺内にある文尺斎花城の句碑



東都新川　雄山
発起　文鳥
調布玉川　山月
外八名（略）
文政辛巳之春
文尺斎連
友人徠僚山隠士吉阿

文尺斎花城の句碑・裏面の記銘

【文尺斎花城の句碑】

みゆきさんは加瀬山の了源寺に行ったことがありますか？

夢見ヶ崎動物公園のそばにあるお寺ですよね。動物を見に行くついでに入ったことがあります。

境内に文尺斎花城の句碑があることはご存知ですか？

いえ、本当に少し見ただけなので…知りません。

では文尺斎花城について少し勉強してもらいましょう。花城は寛延2（1749）年、南加瀬の旧家に生まれ、三橋郷右衛門と称し、三橋家九代目を継いだ人です。

三橋という一族の当主だったんですね。でも句碑があるなら、文化的な活動もしていたんですか？

そうです。その傍らで俳諧を三世恵尺斎蓼和に学び、その門人として活躍しました。

なんだか難しい名前の人が師匠だったんですね。

ええ。さらに彼は松尾芭蕉の弟子である、服部嵐雪の系譜を組んでいるのですよ。

松尾芭蕉や服部嵐雪は知っています！その流れを組んだ俳人だったのなら、すごい人だったんですね。

彼にはやはり弟子が多くいて、特に多摩川対岸の調布あたりに多かったそうです。

ところで了源寺の句碑には何が書かれているんですか？

この句碑には了源寺の春の美しい趣が詠まれています。

松杉の　志つくすさ満之　朝左久羅

「松杉」の句といって、彼の自選句集である「調布の真砂」に収録されているものですよ。句碑は文政4（1821）年の春、花城が73歳の時に建立されました。

加瀬山は今以上に自然豊かだったんでしょうね。

句として残したくなる風景があったのでしょうね。この句碑の裏面を見ると、天保2（1831）年に弟子の「文尺斎連」というグループが建てたことが分かります。なお、花城はこの年に没しており、彼のお墓は南加瀬の長弘寺にあります。

当時のこのあたりは、文化的な余裕や豊かさの感じられる地域だったのかもしれませんね。

長屋門

石井家長屋門

幸文化センター（幸市民館／幸図書館）の北側の道（大師堀跡）を西に歩くと、左手に古い長屋門が見えてきます。この両袖型長屋門（石井家長屋門）は文政3（1820）年に再建されたもので、市内有数の長屋門の一つです。石井家は享保18（1733）年に現在の場所に居を構え、代々古川村の名主を務めました。また、道路向かいの石井家墓石の土台には、北条氏の家紋である三鱗が彫られており、北条家につながる家系であることがうかがわれます。

区内にはもう一つ、深瀬家の長屋門が残っています。享保7（1722）年に建築され、昭和62（1987）年に改修されました。改修以前は瓦葺き屋根の佇まいでした。深瀬家もまた代々名主を務め、長屋門は六代目の三右衛門が建立したとの古文書が、川崎市市民ミュージアムに寄託されています。

開港した横浜港の様子（『横浜開港見聞誌』五雲亭貞秀・画）
【所蔵】横浜開港資料館

象の買い入れの件・古文書
【出典】『郷土よこはま 106号』

【横浜開港と下平間成川氏】

下平間の称名寺の本堂左手に、ひときわ高い慰霊塔が目につきます。これは、初代の平間屋平五郎とその一門の人々の慰霊の碑であるといいます。

平間屋平五郎さんですか？「平間」とあるし、その辺りの人？

ええ。安政6（1859）年、日米修好通商条約によって神奈川（現在の横浜市）が開港されました。開港に伴い通商貿易は急速に進展しましたが、この外国貿易を仲介する貿易商人の中に、川崎からただ1人乗り込んだのが彼でした。

当時の貿易関係の実業家というわけですね。

そうなります。初代平五郎は醤油屋成川重兵衛の子として文化9（1812）年、武州橘樹郡下平間村（現在の幸区下平間205番地）に生まれました。その後分家し、安政5（1858）年に江戸南伝馬町に「ひらまや」を出し、人足請負、運送、土木業を開業します。

彼は相当な蓄財を携えて、幕府の貿易商人の横浜進出奨励政策に率先して応じ、横浜開港場に進出しました。

江戸に出て一旗揚げ、さらにいち早く貿易商人となる。時代を読むのがうまい人だったんですね！

平五郎は、この横浜支店を長男・市五郎（二代目）、次男・平次郎（三代目）、二人の兄弟に共同経営をさせ、自らは江戸本店から経営指示をしていました。

兄弟での共同経営はその後うまくいったんですか？

いえ、二代目は病弱で、明治3（1870）年に33歳の若さで亡くなっています。しかし三代目は経営規模をさらに拡大し、平間屋全盛期を迎えるまでになりました。

父親の才覚が息子にも受け継がれたわけですね。

平次郎は文久2（1862）年に吉田橋（現在のJR関内駅桜木町寄り）を架け替え、明治6（1873）年に日本波止場を仲間と築造するなど、功績を残しました。

幅広い功績を残しているし、一般には遠い存在だったのかな。

ところがそうでもなくて、彼は、明治初期の実業家として異彩を放った人でもありました。米国商人から象を買い、各地で象の見世物興業を行っていましたが、一般庶民からは一切お金を取らなかった、といったエピソードも数々あります。

大実業家にも関わらず、庶民の味方でもあるなんて、ステキな方だったのでしょうね。

そのような人物だったためか、平次郎は人々との結びつきも多彩で、三渓園を開いた原善三郎・吉田健三（吉田茂の父）・下岡蓮杖（写真業の創始者）など、横浜の実業家たちとの人脈が強かったようです。

素晴らしい人格者は、自然と人の繋がりが広がるんですね。

とりわけ平沼新田（現在の横浜市西区平沼町）を開拓した平沼九兵衛（元横浜市長平沼亮三の父）が資金困難になった時、彼のために「お助け競馬」を開催し、その収益を寄付した逸話が残されています。

う～ん、やっぱり偉大な人なんですね！

【延命寺養父内氏】

みゆきさんは伊勢参りという言葉を知っていますか？

伊勢を参るということは、三重県の伊勢神宮を参拝することじゃないかな？

小向村の梅屋敷（明治初期）
【出典】『川崎市史 通史編3』

明治天皇御幸之蹟碑
（幸町交番付近）

明治天皇臨幸御観梅跡碑
【提供】さいわい歴史の会

養父内氏慰霊の碑（延命寺内）
右：表面の記載　左：裏面の記載

紀元二千五百五十三年
明治二十八年十二月六日
納於皇金二圓

建之発起人

御幸村長　島養弥兵衛
矢向小学校教員　小泉太次兵衛
御幸小学校教員　沼野吉乙
南河原村　石井亀次郎
野口壱右エ門　加藤祐次郎
深瀬清右エ門　本多善助

外賛成人百一人

三重県伊勢国度会郡

養父内　功君　山田ノ人大神宮御師龍大夫ノ手代故有テ我邸内ニ流遇シ明治廿五年八月一日天寿ヲ以テ享歳六十八遂ニ長逝ス

養父内勇先生　先生ハ養父内功君長男ナリ我南河原学校ニ職を奉スル十余年其間勤労一日ニ非ズ明治廿七年一月一日享歳廿八病為没セラル嗚呼悲哉

そうです。ただ、一般的な参拝とは少し意味合いが異なり、江戸時代に庶民の移動が厳しく制限される中、集団で参詣できた一種の社会現象のことを指します。

へ～、社会現象！それも何か幸区と関係があるんですか？

ええ、都町の延命寺にある高さ1m余の石碑が関係しています。碑には養父内功という人について刻まれており、「現在の三重県宇治山田市の人、大神宮御師龍大夫の手代」とあります。「大神宮御師」は伊勢神宮の神を祀る人をさします。

ということは「手代」が養父内功さんってことですね。

ええそうです。ちなみに一般的には「御師の手代」と言われています。「御師」は、伊勢神宮に参拝する際の手配・宿泊・旅程の面倒をみる管理者を意味しています。

御師の手代はどんな役割を持っていたんですか？

各地に出張し、村々に「お伊勢講」という組織を立ち上げ、村の人たちのお伊勢参りの手助けや案内をする役割のことでした。

お伊勢講ではどのようなことが行われていたんですか？

講では月掛けの形で旅行資金を積み立てる仕組みが使われていました。そして春にくじ引きを行い、村の代表として数人がそのお金を使って伊勢参りに出かけたそうです。村の人々が結束するきっかけにもなったそうですよ。

現在のようにどこへでも気軽に行ける時代ではなかっただろうし、大変なことだったんでしょうね。

出発時や帰還時は盛大にお祝いをしていたようです。そのためか、幸区内に伊勢の神を祀った「神明社」が現在も多くあります。

また、碑文には養父内功の息子である勇についても書かれています。

息子さんは何をされた方だったんですか？

碑文によると寺子屋の先生を務めていたようです。若いころから父親に同行して伊勢の街道で育ち、読み書きが堪能だったので、教育に飢えていた南河原で村人から頼りにされていたのでしょうね。

父子揃って幸区域の人々に大きな影響を与えたんですね。

この碑はきっと、養父内父子に感謝の念を込めて建立された慰霊の碑なのでしょうね。

末吉橋の橋場

現在の末吉橋周辺の様子
手前はあぐり地蔵尊

二ヶ領用水の悪水堀（排水）が、鶴見川に合流する地点の末吉橋際、ちょうど幸区の小倉と、横浜市鶴見区江ヶ崎の境を接するところに末吉橋の橋場がありました。橋場は今日の船着場や波止場のことです。鹿島田・南加瀬・小倉・江ヶ崎などの村々において、二ヶ領用水と小倉用水の恵みを受け栽培した米・農産物を、この橋場を拠点として江戸に舟で出荷し、江戸からは田畑の肥料となる糞尿を持ち帰り、農産物の生産を行っていました。近年その重要性が叫ばれる循環型の社会が、江戸時代にはすでに成立していたのです。

また、風聞ではあるものの、これらの物資の運搬を行う業者が当時多く存在し、その水夫たちのための「仁藤町」という歓楽街が小倉にあって、大いに賑わっていたといわれています。

【明治天皇御幸之蹟碑】

幸区は「幸せ」の区、この素敵な名前の由来はあるんですか？

それに答える前に、小向に梅林があったことをご存知ですか？

いえ、知りません。あの辺りで梅林を見たこともないです。

小向の一帯は江戸時代の始めころから梅を栽培し、江戸の人々の梅干の原料として梅の果実を提供しており、当時小向の梅林は観梅の名所だったのです。

名所になるほどの賑わいがあったのですね。その梅林が区の名前と関係しているんですか？

ええ。明治17（1884）年の3月19日、明治天皇はこの小向の梅林をご覧になるため、川崎宿から馬を連ねておいでになり、幸町から府中街道に出られました。この街道との合流点を二ケ領用水の大師堀が流れており、そこに架かっている橋を渡られ、小向に向かわれました。

その当時、明治天皇がお越しになられると分かった時は、大変な騒ぎになっていたのでしょうね。

私もみゆきさんと同じように思います。天皇陛下が外出なさることを「行幸」と呼びますが、「御幸」とも書きます。行幸にちなんで明治22（1889）年に市制町村制が施行されたとき、「御幸」村と名付けられました。「幸区」の名称もこのことに由来しているんですよ。

幸区の名称には、とても立派な由来があったんですね。

ええ。その後、明治40（1907）年には原三渓が観梅に訪れました。その際、果実の付きが良くないので木を切り取ってしまうことを聞いた原は、その梅の木を買い取り、現在では国の名勝に指定されている、横浜の三渓園に移植しました。

そのエピソードからも、小向の梅林が素晴らしいものだったことが伝わってきます。

ええ。ですがその年の夏に、このあたり一帯は多摩川の大洪水に見舞われ、小向の梅林は見る影もなく腐れてしまいました。

うーん、残念ですね。当時は今以上に自然災害への抵抗は難しかったのでしょうね。

昭和に入り、明治天皇が行幸の際に渡られた橋が修復されました。その際に元々橋に使用されていた古い石柱（橋板）が発掘されたので、地元の有志によりこの石柱を使って昭和15（1940）年に「明治天皇御幸之蹟碑」が建立されました。

明治天皇が渡られた橋を使ったんですね！その碑はどこにあるんですか？

幸町交番付近の府中街道沿いに現存しています。裏面には、当時の川崎市長、村井八郎によってこの石柱の由来が彫られていますが、残念ながら現在は剥落が激しく、読字が困難となっています。

70年以上前に建立されたものですし、しょうがないですね。

もう1つ、小向の梅林で明治天皇が小休止された場所には、昭和16（1941）年に、当時小向の市会議員であった増山周三郎らによって「明治天皇臨幸御観梅跡碑」が建てられました。御幸公園内にあるので見に行ってみてください。

御幸公園に碑があったんですね。注意してみていなかったな。今度見に行ってみます！

なお、明治天皇御幸之蹟碑、及び明治天皇臨幸御観梅跡碑はいずれも、中幸町の石工であった、杉山角次郎の作によるものです。

『波頃の夕暮れ』和田英作・画（明治30年作品）
【所蔵】東京藝術大学

古市場緑道
（かつての多摩川の流路）

旧多摩川の蛇行の様子
【出典】『川崎史話　中巻』を原図に改変

【古市場の神奈川県編入】

幸区の北に位置する古市場は、元々東京側に属していました。明治45（1912）年4月、東京府（現在の東京都）から神奈川県（当時まだ川崎は市になってはいませんでした）に編入されたのですよ。

え？そうなんですか。そういえば古市場は、多摩川を挟んで東京と接する位置にありますけど、なんで多摩川を飛び越えて東京側になっていたんですか？

実は、昔の多摩川の流れは今のものとは異なり、古市場の南側を通っていました。元々東京側と陸続きだったのです。しかし度重なる多摩川の洪水で流れが変わり、東京側と切り離されてしまいました。

へぇー今とは違う位置を流れていたんだ！元の多摩川は具体的にどの辺りを流れていたんですか？

流れが変わり、徐々に細い川になっていったその流路が、現在は古市場緑道（古市場コミュニティ道路）として整備されていますよ。

そっかー確かにあの緑道は、川の流れのようにカーブしていますね。多摩川が流れていたんだー

実は元々多摩川は、幸区域の他の場所でも蛇行しながら流れていたんですよ。例えば、さいわい緑道や南河原公園、川崎駅の辺りも、多摩川の流路だったそうです。

川崎駅の辺りもですかー今では想像がつきませんね。でも古市場は、川の流れが変わったからといって、簡単に「ここは今日から神奈川県です」とはならないですよね。神奈川県に編入するのは、とても大変なことだったんじゃないですか？

もちろんさまざまな出来事もあり、大変だったようですよ。しかし、川崎町出身の衆議院議員、添田知義が、神奈川と東京の県境を現在の多摩川本流の中心にすることを国会で提案し、案が通過しました。

当たり前にある県境をめぐってそんなやり取りが行われていたなんて、全然知りませんでした！

明治時代の出来事ですから、無理もありませんよ。この提案は明治45（1912）年4月1日から実施することになり、古市場はこの時に神奈川県に編入、現在の川崎市幸区となったのです。

古市場は幸区内で比較的新しい地域なんですねー

アミガサ事件

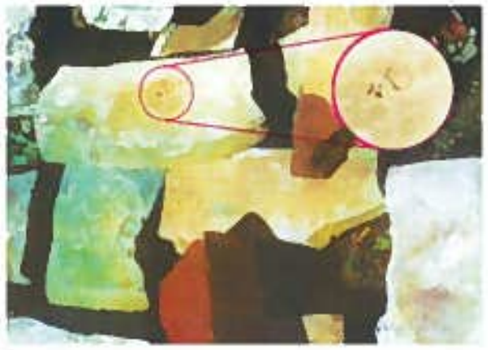
かつて有吉堤があった
中原区上平間付近

大雨が降ると丸子や南河原で、堤防がいつも破壊されました。沿線の住民たちは国に川崎側の堤防を高くすることを要求しても東京側より高く強く築くことは認められませんでした。怒った住民（農民）たちは、編み笠を被って横浜の県庁へ押しかけました。この大正3（1914）年に起きた事件を「アミガサ事件」と名付けました。それより少し前の明治45（1912）年には川崎選出の衆議院議員の添田知義が、神奈川・東京の県境を多摩川の流れの中心線で区切ることを提唱、これが認められ、古市場一帯が川崎側の御幸村に編入されました。大正5（1916）年、ガス橋から丸子の日枝神社にかけて「道路を改修する」という名目のもと、御幸村農民の手によって堤防が構築されました。時の県知事の名を冠して「有吉堤」と名付け、喜び合いました。

大規模工場の進出

御幸煉瓦製造所
【出典】『横浜都案内記』

横浜（御幸）煉瓦製造所の誕生を皮切りに、幸区域に多くの工場進出が始まりました。幸区の「工業都市」としての繁栄を、ここでは紹介します。



『分銅印』とされる印がある煉瓦
（小向の増山邸改築の際に敷地内より出土）

【御幸煉瓦製造所】

明治21（1888）年、御幸村字戸手に、神奈川県最大のレンガ工場である横浜煉瓦製造所が開業しました。明治24（1891）年には、増山弘三郎が経営を継承、御幸煉瓦製造所と名称変更しました。

煉瓦の工場があったんですか。しかも神奈川県最大！

そうなんです。増山氏の経営となったときにドイツ人ホフマン考案のホフマン窯という円形の大きな窯を導入、機械抜きでベルトコンベアーを用い大量生産を行うという、当時の先端をゆく技術を使用した煉瓦製造所となりました。

文明開化の時代、西洋の技術が積極的に導入されたんですね。

これが旧川崎界隈の最初の工場進出だろうと考えられます。

かつては川崎といえば「工場」と言われていたんですよね。その始まりが幸区からだったんだ！

そういうことですね。煉瓦の原料は、南河原や戸手あたりの真土、小向周辺の粘土、小向仲野町から古市場にかけての砂まじりの土をトロッコや馬車で運びこみ、これを混合して使いましたが、ホフマン窯で生産された煉瓦は水分が少なく堅いという高い品質と低価格に定評があったといいます。

土地のものを使った製品を高品質低価格で提供する、理想的な工場だったんですね。

ええ。そしてここで製造された煉瓦は、都市化が進む明治中期～大正期の横浜で、多くの建物に使用されていたようです。

それなら、今も横浜あたりに残っている煉瓦造りの建物の中にも、ここで作られた煉瓦が使われているのかもしれませんね。

その手がかりとなるのは、煉瓦に刻まれた「分銅印」と呼ばれる刻印です。横浜の関内・山手地区で出土した煉瓦の刻印を調べていくと、よく目にするのがこの刻印で、これらの建物の煉瓦が御幸煉瓦製造所でつくられたものだ、ということが最近の調査で分かってきました。

その刻印があるかどうか見ながら横浜を歩いてみると、また違った表情が見えてくるかも！

面白そうですねー明治中期以降、横浜に赤煉瓦の街並みが広がった背景には、こうした近郊の煉瓦工場の存在があったのですね。

でも今はその煉瓦工場を見かけませんね。

関東大震災前年の浦賀水道（三浦半島と房総半島に挟まれた海峡）を震源とする地震で、煙突の3分の1が倒壊し、修復費が必要だったことや、多摩川の洪水のたびに工場が冠水し、操業休止に追い込まれたこと、関東大震災を期に、より耐火・耐久性の強いコンクリートが建物に使用されはじめたこともあり、約35年で姿を消してしまいました。

堀川町ガード（昭和22年頃／メーデー時）
【出典】『レンズで追う川崎統一メーデー』

明治製菓川崎工場（昭和28年頃）
【提供】増田道雄氏

川崎駅前の様子。奥には明治製菓川崎工場が見える。
（昭和40年代）【提供】さいわい歴史の会

【さいわいの夜明け】

明治39（1906）年、横浜精糖（後の明治製糖）が、続いて明治41（1908）年に東京電気（現在の東芝）が、川崎駅の北側に操業を開始しました。

どちらとも今も幸区にある大企業ですね！

そうですね。ですが過去に撤退の危機もあったんですよ。明治40（1907）年、同43（1910）年と立て続けに多摩川の大洪水に見舞われ、両社とも大きな被害に遭ったため、このような状況に見切りをつけて、撤退しようとしたのです。

そんなことがあったんですか。でも、そんな状況になったのに、なぜこの地に残ったんですか？

当時の川崎町長の石井泰助らが引き留めに努めたんです。新しい時代の到来を予見していたのでしょうね。

その後の幸区を考えると、その時の判断が正しく作用したということでしょうか。

そうですね。日吉村の加瀬山を崩し、その土砂を使って古多摩川の流路跡のため低湿地帯であった、南河原東南部（多摩川の土手から川崎駅西側の地帯）の土地をかさ上げし、工場用地を造成しました。

かなり大規模な工事が行われたんですね。

ええ。かさ上げは、当時の多摩川の土手（おおよそ現在の多摩沿線道路面）と同じ高さまで土砂を積んだそうです。そのため、東芝の85周年記念誌に「周辺の家々が大水で床下程度に水に浸かっても会社は、なんともなかった」ということが書かれています。

加瀬山は本来の形を変えながら、幸区の地盤としてまちの発展に貢献してくれたんですね。

【川崎駅と周辺の開発】

川崎駅にまつわるエピソードも教えてください！

明治維新が起こった後、明治5（1872）年に新橋・横浜間に鉄道が敷かれましたよね。その際、川崎駅も設置されました。

日本の鉄道の創設期から川崎駅はあったんですね。それならこの地域の住民は、かなりの恩恵を受けたんでしょうね。

戸手浄水場（大正13年頃）
【出典】『川崎市水道八十年史』

川崎駅西口東西連絡歩道橋開通式（昭和40年代）
【提供】太尾国義氏

実は必ずしもそうではないのです。川崎駅の改札口は東側だけで、戦後に至るまで、西口には改札口がありませんでした。東芝堀川町工場へ直接入ることの出来る改札口は以前からありましたが、幸区域の住民は使えませんでした。

えー！それはかなり不便だったんじゃないですか？

ですから、東芝の敷地と国鉄（省線とも言った）の柵の間の、人が2人並んでやっと通れるくらいの狭い道を進んで東芝と明治製菓の間にあった踏切を渡るか、東芝の塀の北側をまわることで東側の改札に出るしかありませんでした。

聞いているだけで不便な状況が頭に浮かんできます。

その後、昭和7（1932）年に先ほどの踏切の位置に半地下道（通称ガード）が設けられました。しかし水揚げポンプが故障したり、戦時中には停電で年中水がたまって通行できず、結局明治以来の踏切を通ることがしばしばでした。

そんな状況だと、文句を言う人も多かったんじゃないかな。

ええ。大正3（1914）年に南河原地域の住民は、鉄道省に西口改札口設置の請願をするのですが、駅は川崎町に所属していたので、南河原の住民に請求権がないと門前払いされてしまいました。結局、戦後になってようやく西口改札口が設置され、東西自由通路も国鉄の線路を跨いで開通したのです。

戦後ですか。長い時間がかかっているけど、ようやく今の状態に近づいたんですね。改札口一つにも歴史があるんだな～。

【戸手浄水場】

幸区役所は当然、幸区が誕生してからできたとして、それ以前は何があったんですか？図書館なども含めると広い土地ですよね。

面白い視点ですね。以前は戸手浄水場がありました。市内最初の近代水道施設で、大正10（1921）年に、川崎町（現在の川崎区北部）により建設されました。

へえー あんなところに浄水場があっただなんてびっくりです。でも浄水場のような大きな施設だと、建設するのも大変そうですね。

大正8（1919）年11月23日に、戸手水道用地で起工式が行

御幸村・川崎町合併問題

並んで手をつなぐ3人の前町村長
左から矢島七蔵、小林五助、石渡幸蔵
【出典】『鶴浜商易新報』

関東大震災以前、南河原を中心に川崎町との合併が検討されましたが、小向・戸手の反対や、御幸村村議会での否決により中断されていました。ところが震災後の周辺状況の変化や、御幸村の飲料水確保の問題を契機に、合併への機運が一気に高まっていきました。合併賛成論者の鳥養仁一は著書「崎幸併談」の中で、当時の状況を「川崎町という秀才の家庭からあなたの娘を申し受けたいといってきたようなものである。しかも我々は十余年前に同様の申し出をことわったにもかかわらず懇望を受けたのだから我々は余程考えなければならない、今が娘のやりどきである。」と記述しています。

このような紆余曲折を経て、大正13（1924）年7月1日をもって川崎町、御幸村、大師町が合併して川崎市が誕生したのです。

日吉村の幸区合併問題

明治22（1889）年の市町村制施行により、矢上川を挟んで川崎市側の鹿島田・南加瀬・小倉・矢上の一部と、西側（現在の横浜市港北区）の矢上・箕輪・駒林・駒が橋の七つの字が合併して日吉村が誕生しました。しかし、しばらくして、現在の中原区西加瀬を含む北加瀬が、住吉村から分離して日吉村に合流し、長らく中原の行政区域に入っていました。

昭和の始め、慶應義塾大学が東急東横線の開通に合わせ、現在の日吉地区に校舎建設を計画すると、時の日吉村は横浜市への全村合併を協議しました。しかし川崎市による誘致計画などもあり、矢上川を挟んで村会が二分される形で大いに荒れ、村会議員間で乱闘騒ぎまで起こりました。刑事問題に発展した経緯もあり、県の仲立ちのもと、日吉村は矢上川を境として、川崎市と横浜市に合併されました。昭和47（1972）年、川崎市の区制施行に伴い、御幸・南河原・日吉の三地区を以て幸区の誕生となりました。

加瀬山から眺めた新鶴見操車場ができる以前の田園風景
（大正初期／奥の鳥居は移設前の鹿島神社）【提供】沼田武氏

尻手駅近辺の蓮池の風景を走り抜ける南武線（昭和30年代）
【提供】さいわい歴史の会

多摩川のほとりにあった川崎河岸駅（昭和20年代）
【提供】さいわい歴史の会

南河原小学校近辺の川崎河岸線（昭和20年代）
【提供】さいわい歴史の会

われ、建設工事が始められました。そこから工事は2年を要し、大正10（1921）年3月にようやく完成したそうです。同年7月1日に通水を開始し、10月15日に、宮前小学校で関係官庁・地元有志などによって盛大な通水式が行われたようです。

2年もかかったんですね。大変だったんだろうな。浄水場の水はどこから運んでいたんですか？

現在の中原区宮内に位置した水源地で井戸を掘削して、多摩川の伏流水を取水していました。そして戸手まで導管を使って引水して、一旦この浄水場で貯水・浄水をし、最後は川崎町に送りました。

あれ？幸区域に水は供給されなかったんですか？

いえ、その後、地元御幸地域や、大師河原町（現在の川崎区出来野）にも配水しましたよ。大正13（1924）年7月1日に御幸村・川崎町・大師河原町が合併し、川崎市が誕生したのですが、この合併の主要条件の一つにこの上水道の配水があったようです。

安心して飲める水を、多くの人が待ち望んでいたんだ。水はどの程度市民に供給されたんですか？

給水人口は、大正10（1921）年は1万0988人だったのが、大正13（1924）年には2万3589人となり、3年間で実に2倍以上に増えました。

やっぱり多くの人が水を欲していたんですね。

実際、これに伴って、戸手浄水場の拡張が年を重ねて続けられました。ただ、その後も川崎市の水道事業は大きな発展を遂げていったため、昭和43（1968）年に戸手浄水場はその役割を終えました。

10年以上に渡って、川崎市民の生活を支えていたわけですね。

なお、跡地に建てられた幸区文化センターの入口に「川崎市水道発祥之地」の記念碑がありますよ。

【南武線】

幸区を横断する南武線はいつごろからあるんですか？

大正の中ごろです。京浜工業地帯の近代化に伴い、工場の建設に必要なコンクリートの材料需要が増大しました。それに対応するため、多摩川上流で採掘された砂利や石灰石を輸送する目的からできました。

旅客が主ではなくて、砂利の運搬から始まったんですね。

御幸村の秋元喜四郎ほか当時の川崎町や中原村、稲田村などの有力者たちにより鉄道建設の計画が立てられ、大正9（1920）年に多摩川砂利鉄道として川崎町―稲城間の鉄道敷設免許を取得しました。

そんなに長い歴史があったんですか。しかも川崎全体が関わるような大計画だったんですね。

そうですね。ですが資金不足から当時の大資本家であった浅野総一郎に事業が引き継がれ、南武鉄道と改称されました。その後、旅客輸送の必要性が出てきたことから、昭和2（1927）年に川崎の起点を2つに分け、東海道本線の川崎駅を起点とする川崎―登戸間の旅客輸送路線と、新たに設置した川崎河岸駅と矢向駅間を結ぶ貨物輸送用支線の2路線が開業されました。

ここで旅客機能が生まれたんですね。あれ？川崎河岸駅ってありましたっけ？

川崎河岸駅は元々、多摩川のほとりにあった駅です。当初の計画では川崎から南河原、戸手、塚越と直線で結ぶ予定のところ、新鶴見操車場の計画が発表されたため、利便性を上げるため、急きょ路線を変更しました。尻手―川崎間が大きく曲がっているのはこのためです。

ああ、確かに曲がってますね！平地の幸区で大きく曲がるのはそのためだったのか。

そうです。昭和4（1929）年には川崎―立川間の全線が開通し、さらに石灰石を浅野セメント株式会社の工場に直送するため尻手で本線と分かれ、浜川崎に至る貨物線が昭和5（1930）年に開業されました。

ここまでくると現在の路線状況とほとんど同じですね。

戦時中の昭和19（1944）年には、軍事上の重要路線として国有化され、国鉄南武線となりました。その後、昭和29（1954）年には尻手駅付近が高架となり、現在の路線の形が整いました。

あの辺りの高架化はその頃できたんですね。

なおその後、砂利採掘制限により矢向―川崎河岸間の砂利運搬目的が薄れ、昭和44（1969）年には東京製綱が移転したため、その存在価値を失いました。昭和45（1970）年に廃線となり、その跡地は昭和51（1976）年にさいわい緑道公園となりました。

あの緑道を電車が走っている姿を見てみたかったな。

【新鶴見操車場】

小倉陸橋の辺りにだだっ広い更地がありますよね。あそこには元々何があったんですか？

新鶴見操車場がありました。ではその話をしましょう。小倉に操車場造りの計画が始まったのは、大正の中ごろでした。それまで東京の物流を支えていたのは、埼玉県大宮の操車場でしたが、首都圏の工業生産の増大で物流が拡大したため、新たな操車場が必要になりました。

それだけの物流が当時からあったんですね。

そこで、東京圏・京浜工業地帯に隣接し、物資の輸送に適した小倉の地が、物流の拠点に選ばれました。この地域はかつての多摩川の流域で、民家も十数軒と比較的容易に操車場敷設が可能でした。

色々な条件が重なって、小倉の地が選ばれたのですね。

ケチャップ工場

トマトケチャップとトマトソースのパッケージ
【提供】成川義氏

昭和の始めのころ、小倉でトマトケチャップが作られていました。トマトは西洋から渡来の食べ物で、その当時、まだ一般には馴染みの薄い野菜でした。しかし小倉の農家の方はトマトをいち早く栽培し、トマトケチャップに加工して横須賀にいた日本海軍の兵隊さんの食用に供給し、好評を得て一時はたいそう流行ったそうです。ところが太平洋戦争が徐々に厳しさを増すようになり、食料確保のために米や麦の増産が声高に叫ばれるようになって以降、次第にトマトの栽培は困難になっていきました。

終戦後もトマトケチャップづくりは、細々ながら続けられていましたが、昭和24（1949）年～25（1950）年ころには残念ながら、その製造も途絶えてしまいました。

鹿島田跨線橋から撮影した、新鶴見操車場の跡地。現在はJR貨物新鶴見機関区となっている。

鹿島田跨線橋から新鶴見操車場の北側を撮影（現在の中原区方面）。（昭和30年代）【提供】沼田武氏

そうです。ただ、一帯は深い湿田地帯だったので、加瀬山西端丘陵部から切り出した土砂で埋めることで、広大な土地が確保されました。昭和元（1926）年に現在の新川崎駅ホーム北端付近の微高地に鎮座していた、鹿島神社を現在地に移し、昭和5（1930）年には操業が開始されました。

加瀬山を削ったのは残念ですけど、操車場の完成が、日本の物流の発展につながったんですね。

そういうことです。以来、戦時中を通し昭和40年代末まで、東洋一の規模をもって首都圏のみならず日本の物流を支えてきました。

東洋一！そこまで大規模なものだとは思いませんでした。でも今はないんですよね。

敗戦後も物資輸送の根幹を支えてきたわが国の鉄道も、昭和40年代後半には、その位置をトラック輸送に譲るようになりました。半世紀にわたって日本の物流を支えてきたこの操車場も、昭和47（1972）年にその役目を終えました。

物流も、鉄道からトラック輸送へと、徐々にその形態を変えていったんですね。

【わが国初の公営工業用水道】

工業地帯の歴史に関連した話があります。昭和11(1936)年、わが国最初の公営工業用水道が幸区域で計画されました。

工業都市だけあって、工業用水道の整備も早かったんですね。

そうなんです。臨海部の埋め立て地域へ供給する必要があったのです。昭和12（1937）年の日華事変勃発による物価および労賃の高騰が響き、完成が遅延しましたが、昭和14（1939）年7月8日に、1日給水量8万1000㎥の施設能力を持つ、公営工業用水道がようやく完成しました。

へえーすごい水の量ですね。どこから集めていたんですか？

稲毛・川崎二ヶ領用水の余剰水を利用していました。その貯水・配水のための施設として、平間浄水所（当初は平間水源管理所）が設けられました。現在の中原区上平間にある平間配水所の基礎ですね。

確かにそのような施設がありますね。古い施設だったんだ。

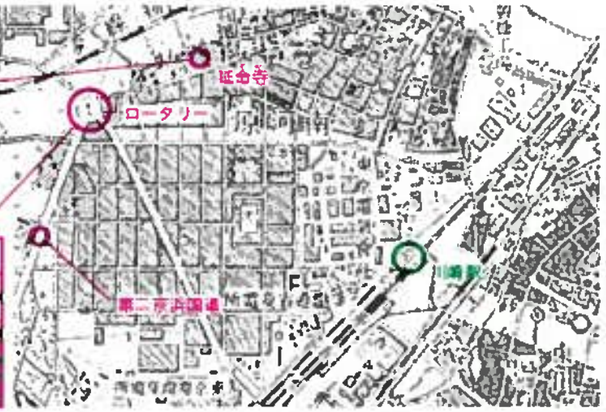
平間配水所付近の、二ヶ領用水と南武線が交差する地点で、二ヶ領用水は、町田堀と大師堀に分岐し、そのまま暗渠になります。その分岐地点には、平間配水所に引水するための取水口の形跡が残っていますよ。歴史案内板が目印です。

大規模な工場が次々と建造されていくにつれ、就業人口も居住人口も徐々に増加していった幸区域では、南武鉄道や第二京浜国道を始めとした交通インフラの整備、工業用水や生活用水など、水道施設の充実など、近代的な発展の一途を辿ることとなりました。

このような大きな発展も、時の流れとともに過去のエピソードとなってしまいましたが、工業都市として時代を切り開いてきたことは、間違いなく現在の幸区の大きな礎となっています。この時代のことを深く学ぶことが、これからの幸区について考えていく上でも、とても大切なことかもしれません。

川崎大空襲殉難者供養塔（延命寺内）

かつてロータリーがあった都町交差点



昭和20年頃の第二京浜国道、ロータリーとその周辺
【出典】『2.5万分1地形図：川崎』（国土地理院）

【幻のマラソンコース】

東京・横浜間を結ぶ第一京浜国道が、大正15（1926）年に開通しましたが、自動車時代の到来は急テンポで、すぐに満杯の状態でした。そこで第二京浜国道（国道1号線）の建設が急務となりました。

第二京浜国道は自動車需要に応えるために建設されたんだ。

折しも「東京オリンピック」が昭和15（1940）年に東京で開催されることになり、オリンピックマラソンコースも兼ねてこの国道の建設が行われたそうです。

東京オリンピックは昭和39（1964）年だったような？

それ以前に開催予定だったのですが、太平洋戦争突入で開催権が返上されたのです。戦時中ですので道路建設も中断、戦火で木造の橋が焼失するなどし、マラソンコースは幻となってしまいました。

娯楽の少ない時代に残念なことですね。

戦後工事が再開され、川崎部分は昭和29（1954）年にほぼ完了しました。横浜まで全線開通したのは昭和30（1955）年です。

長い時間をかけてようやく完成したわけですね。

電灯線の道路下埋設や、斬新な街灯の設置のほか、昭和24（1949）年に完成した多摩川大橋のそばの御幸梅林際にドライブインが設置されるなど、新時代の到来を感じさせるものでした。昭和31（1956）年にヒットしたフランク永井の「夜霧の第二国道」は、新設国道の気分と戦後復興期の人々の心情を良く捉えている作品ですよ。

歌にもなるなんて、第二京浜国道は当時の人々に愛された、素敵な道路だったんですね！

【川崎大空襲】

第二次世界大戦のころ、この辺りはどのような状況でしたか。

戦時中はやはり空襲がありました。この辺りで一番大きな被害があったのは昭和20（1945）年4月15日の川崎大空襲の時です。

大空襲というのなら、かなりの規模の空襲だったんですか。

相当な被害を受けました。都町近くを走る第二京浜国道にあったロータリーもその一つです。

ロータリーって海外でよく見かける円形の交差点のことですね。どのあたりにあったんですか。

現在の都町交差点の位置にありました。国道敷設工事が戦争により中断中で、広い空間ができていたため、多くの近隣住民がそこに避難していました。

避難場所として分かりやすい場所だったんですね。

そうです。しかし空から見れば大変目立つ場所だったため、彼らの頭上に焼夷弾や人畜殺傷爆弾が降り注がれ、1時間余の爆撃に200人余の死者が出ました。この日の空襲は川崎最大の被害を受けたものでしたが、死者がこれほど集中的に生じたのはここだけでした。

私は当然、戦争を体験していないですけど、想像を絶する状況がそこにはあったんですね。

恐ろしいことですね。その死者は付近の延命寺境内に収容され、数日間かけて隣接する焼け跡で荼毘に付されました。境内に「川崎大空襲殉難者供養塔」と殉難者の氏名を刻んだ墓誌が建てられ、毎年4月15日に墓前で慰霊の集いを地域の人たちが行っています。